

夏目漱石

現代日本の開化

現代日本の開化

はなはだお暑いことで、こう暑くては多人数お寄合よりあい
になつて演説などお聴ききになるのは定めしお苦しいだろ
うと思います。ことに承うけたまわれば昨日もなにか演説会が
あつたそうで、そう同じ催しが続いてはいくら中あたらない
保証のあるものでも多少は流行はやりすぎの気味で、お聴きに
なるのもよほど御困難だろうとお察し申します。が演説
をやるほうの身になつてみてもそう楽ではありませぬ。
ことにただいま牧君の紹介で漱石君の演説は迂余うよ曲折の

妙があるとかなんとかいう広告めいた賛辞を頂戴したちようだい後あとに出て同君の吹聴ふいちようどおりを遣やろうとするにあたかも迂余曲折の妙を極きわめるための芸当を御覧に入れるために登壇したようなもので、いやしくもその妙を極めなければ降りることができないような気がして、いやがうえに遣りにくい羽目に陥ってしまうわけであります。実はここへ出て参るまえちよつと先番の牧君に相談を掛かけたことがあるのです。これはないないですが思い切つて打明うちあけてお話ししてしまいます。というほどの秘密でもありませんが、まったくのところ今日の講演は長時間諸君に

対してお話をする材料が不足のような気がしてならなかったから、牧さんにあなたのほうは少しは伸ばせますかと聞いたのです。すると牧君は自分のほうは伸ばせばいいくらいでも伸びると気き丈夫じょうぶな返事をしてくれたので、たちまち親船に乗ったような心持になって、それじゃア少し伸ばしていただきたいと頼んでおきました。その結果として冒頭だか序論だかに私の演説の短評を試みられたのはもともと私の注文から出たことではなはだ有あり難がたいには違ちがないけれども、その代りいやに遣にり悪にくくなってしまったこともまた争われぬ事実です。元来がそういう情

ない依頼をあえてするくらいです。ですから曲折どころではない、まっすぐ真直に行き当ってピタリとしま終いになるべき演説であります。なかなかもって抑揚頓挫とんざ波瀾曲折の妙を極めるだけの材料などは薬にたくも持合もちあわせておりません。と
そういったところで何もただボンヤリ演壇に登ったわけでもないのです。ここへ出てくるだけの用意は多少準備して参ったには違ないのです。もつとも私がこの和歌山へ参るようになったのは当初からの計画ではなかったのですが、私のほうではきんきちほう近畿地方を所望したので社のほうでは和歌山をそのうちへ割り振ってくれたのです。お蔭かげで

私もまだ見ない土地や名所などを捜る便宜を得ましたのは好都合です。そのついでに演説をする——のではない演説のついでに玉津島たまつしまだの紀三井寺きみいでらなどを見ただけでありますから、これ等の故跡や名勝に対しても空手からてでは参りません。お話をする題目はちゃんと東京表おもてで極めてまいりました。

その題目は「現代日本の開化」というので、現代という字は下へ持ってきてても上へ持ってきてても同じことで、「現代日本の開化」でも「日本現代の開化」でもたいして私のほうでは構いません。「現代」という字があつて

「日本」という字があつて「開化」という字があつて、その間へ「の」の字が入つてはいいると思えばそれだけの話です。なんの雑作ぞうさもなくただ現今の日本の開化という、こういう簡単なものです。その開化をどうするのだと聞かれれば、実は私の手際てぎわではどうもしようがないので、私はただ開化の説明をして後はあとあなたがたの御高見にお任せするつもりであります。では開化を説明してなにになる？ とこうお聞きになるかもしれないが、私は現代の日本の開化ということが諸君によくお分りわかになつておるまいと思う。お分りになつていなかろうと思うという

と失礼ですけれども、どうもこれが一般の日本人によく呑^のみ込めていないように思う。私だってそれほど分つてもいないのです。けれどもまず諸君よりもそんな方面によけい頭を使う余裕のある境遇にありますから、こういう機会を利用して自分の思ったところだけをあなたがたに聞いていただくというのが主眼なのです。どうせあなたがたも私も日本人で、現代に生れたもので、過去の人間でも未来の人間でもなんでもないうえに現に開化の影響を受けているのだから、現代と日本と開化という三つの言葉は、^{ことば} どうしても諸君と私とに切つても切れない

離すべからざる密接な関係があるのは分り切ったことですが、それにもかかわらず、お互に現代の日本の開化について無頓着むとんじやくであつたり、またはあまりハツキリした理會を有もっていないなかつたならば、万事に勝手に悪いわけだから、まあ互に研究もし、また分るだけは分らせておくほうが都合が好よかろうと思うのであります。それについては少し学究めきますが、日本とか現代とかいう特別な形容詞に束縛されない一般の開化から出立してその性質を調べる必要があると考えます。お互たがいに開化という言葉を使つておつて、日に何遍なんべんも繰返くりかえしているけれども、

はたして開化とはどんなものだと煎じ詰めて聞き糾ただされてみると、今まで互に了解し得たとばかり考えていた言葉の意味が存外喰違くいちがっていたりあるいはもつてのほかには漠然ぼくぜんと曖昧あいまいであつたりするのはよくあることだから、私はず開化の定義から極きめて懸かりたいのです。

もつとも定義を下すについてはよほど気を付けないととんでもないことになる。これをむずかしくいいますと、定義を下せばその定義のために定義を下されたものがピタリと糊細工のりざいくのように硬張こわばってしまう。複雑な特性を簡単に纏まとめる学者の手際と脳力とには敬服しながらも一方

においてその迂濶うかつを惜まなければならぬようなことが
 彼等の下した定義を見るとよくあります。その弊所をこ
 く分り易やすく一口にお話すれば生きたものをわざと四角四
 面の棺かんの中へ入れてことさらに融通が利きかないようにす
 るからである。もつとも幾何学などで中心から円周に到いた
 る距離がことごとく等しいものを円というというような
 定義はあれで差支さしつかえない、定義の便宜があつて弊害のな
 い結構なものです。これは実世間に存在する円まるいもの
 を説明するといわんよりむしろ理想的に頭の中にある円
 というものをかく約束上取り極めたまでであるから古往

今来変りっこないのでどこまでもこの定義一点張りで押してゆかれるのです。その他四角だろうが三角だろうが幾何的に存在しているかぎりはそれぞれの定義でいったん纏まとめたら決して動かす必要もないかもしれないが、不幸にして現実世よの中なかにある円とか四角とか三角とかいうもので過去現在未来を通じて動かないものははなはだ少ない。ことにそれ自身に活動力を具そなえて生存するものには変化消長がどこまでも付け纏まっわっている。今日の四角は明日の三角にならないとも限らないし、明日の三角がまたいつ円くずく崩れださないともいえない。要するに幾何

学のように定義があつてその定義から物を拵こしらえ出したのでなくつて、物があつてその物を説明するため定義を作るとなるといきおいその物の変化を見越してその意味を含ましたものでなければいわゆる杓子しゃくし定規じょうぎとかでいっつこう気の利きかない定義になつてしまいます。ちようど汽車がゴーツと馳かけてくる、その運動の一瞬間すなわち運動の性質の最も現われ悪い刹那せつなの光景を写真に取つて、これが汽車だ汽車だといつてあたかも汽車のすべてを一枚の裏うちに写し得たごとく吹聴すると一般である。なるほどどこから見ても汽車に違ちがいありませんまい。けれど

も汽車に見逃^{みのが}してはならない運動というものがこの写真のうちには出ていないのだから実際の汽車とはどうてい比較のできないくらい懸絶しているといわなければなりません。御存じの琥珀^{こはく}というものがありました。琥珀の中に時々蠅^{はい}が入^{はい}ったのがある。透^すかして見ると蠅に違ありませんが、要するに動きの取れない蠅であります。蠅でないとはいえぬでしょうが活^いきた蠅とはいえますまい。学者の下す定義にはこの写真の汽車や琥珀の中の蠅に似てあざやかに見えるが死んでいると評しなければならぬものがある。それで注意を要するといっているのであり

ます。つまり変化をするものを捉とらえて変化を許さぬかのごとくピタリと定義を下す。巡査というものは白い服を着てサーベルを下げているものだななどと天から極きめられたひには巡査も遣やり切れないでしょう。家うちへ帰って浴衣ゆかたも着換えるわけにゆかなくなる。この暑いのに剣ばかり下げていなければ済すまないのは可哀想かわいそうだ。騎兵とは馬に乗るものである。これも御もつともには違ちがないが、いくら騎兵だって年が年中馬に乗りつづけに乗っているわけにもいかないじやありませんか。少しは下おりたいでさア。こう例を挙あげれば際限がないから好加減いいかげんに切り上げま

す。実は開化の定義を下す御約束をして喋舌しゃべっていたところがいづのまにか開化はそつち退のけになつてむずかしい定義論に迷い込んでなはだ恐縮です。がこのくらい注意をしたうえでさて開化とは何者だと纏めてみたらいくぶんか学者の陥り易い弊害を避け得られるしまたその便宜をも受けることができるだろうと思ふのです。

でいよいよ開化に出戻りでもどを致いたしますが、開化というものも、汽車とか蠅とか巡査とか騎兵とかいうようなもののごとくに動いている。それで開化の一瞬間をとつてカメラにピタリと入れて、そうしてこれが開化だと提さげて

歩くわけにはゆきません。私は昨日和歌の浦を見物しましたが、あすこを見た人のうちで和歌の浦はたいへん浪なみの荒い所だという人がある。かと思うと非常に静かな所だという人もある。どっちが宣よいのか分らない。だんだん聞いて見ると、一方は浪の非常に荒い時に行き、一方は非常に静かな時に行った違から話がこう表裏してきたのである。もとより見たとおりにんだから両方とも嘘うそではない。がまた両方ともほんとうでもない。これに似寄りの定義は、あつても役に立たぬことはない。が、役に立つと同時に害を為なすことも明あきらかなんだから、開

化の定義というものも、なるべくはそういう不都合を含んでいないように致したいのが私の希望であります。が、そうするとボンヤリしてくる。恨むらくはボンヤリしてくる。けれどもボンヤリしてもほかのものと区別ができる。ればそれで宣いでしよう。さつき牧君の紹介があったように夏目君の講演はその文章のごとく時とするかどぐちと門口から玄関へ行くまでにうんざりすることがあるそうである。これでお気の毒の話だが、なるほど遣ってみるとそのとおり、これでようやく玄関まで着きましたから思いきって本当の定義に移りましょう。

開化は人間活力の発現の経路である。と私はこういいたい。私ばかりじゃない、あなたがただってそういうでしょう。もつともそういつたところで別に書物に書いてあるわけでもなんでもない、私がそういいたいまでのことであるがその代り珍めずらしくもなんともない。がこれすこぶる漠然ぼくぜんとしている。前口上を長々述べ立てた後でこのくらいの定義を御吹聴に及んだだけではあまり人を馬鹿ばかにしているようですが、まあそこから定きめて掛からないと曖昧あいまいになるから、実は已やむを得ないので。それで人間の活力というものが今申すとおり時の流ながれを沿うて発

現しつつ開化を形造つてゆくうちに私は根本的に性質の異つた二種類の活動を認めたい、いな確かに認めるのであります。

その二とおりのうち一つは積極的のもので、一つは消極的のものである。なにか月並つきなみのような講釈をして済みませんが、人間活力の発現上積極的という言葉を用いませんと、勢力の消耗を意味することになる。またもう一つのほうはこれとは反対に勢力の消耗をできるだけ防ごうとする活動なり工夫なりだから前のに對して消極的と申したのであります。この二つの互いに喰違くいちがつて反そりの合

ないような活動が入り乱れたりコンガラカッたりして開化というものができ上るのであります。これでもまだ抽象的でよくお分りにならないかもしれないが、もう少し進めば私の意味はおのずから明瞭めいりょうになるだろうと信じます。元来人間の命いのちとか生せいとか称するものは解釈次第でいろいろな意味にもなりまたむずかしくもなりますが要するに前申ぜんしたごとく活力の示現とか進行とか持続とか評するよりほかに致いたし方かたのないものである以上、この活力が外界の刺戟に対してどう反応するかという点を細かに観察すればそれで吾人ごじん人類の生活状態もほぼ了解

ができるようなわけで、その生活状態の多人数の集合して過去から今日に及んだものがいわゆる開化にほかならないのはいまさらもうしあ申上げるまでもありますまい。さて吾々の活力が外界の刺戟に反応する方法は刺戟の複雑である以上もとより多趣多様千差万別にちが違いないが、要するに刺戟の来るたびにわが活力をなるべく制限節約してできるだけ使うまいとする工夫と、またみずから進んで適意の刺戟を求めあたうだけの活力を這裏しやに消耗して快を取る手段との二つに帰着してしまふよう私は考えているのであります。で前のを便宜のため活力節約の行動と

名づけ後者をかりに活力消耗の趣向とでも名づけておきましようが、この活力節約の行動はどんな場合に起るかといえは現代の吾々が普通用いる義務という言葉を冠して形容すべき性質の刺戟に対して起るのであります。従来の徳育法および現今とても教育上では好んで義務を果す敢かんいまいおう為邁往の氣象を奨励するようですがこれは道德上の話で道德上しかなくてはならぬ、もしくははしかするほうが社会の幸福だというまでで、人間活力の示現を觀察してその組織の経緯一つを司つかさどる大事実からいえは どうしても今私が申し上げたように解釈するよりほか仕方が

ないのであります。吾々もお互に義務は尽さなければならんものと始終思い、また義務を尽した後はたいへん心持が好いのであるが、深くその裏面に立ち入って内省して見ると、願ねがくはこの義務の束縛を免まぬかれて早く自由になりたい、人から強しいられて已やむを得ずする仕事はできるだけ分量を圧搾あっさくして手軽に済ましたいという根性が常に胸うちの中に付つけ纏まつわっている。その根性がとりも直さず活力節約の工夫となって開化なるものの一大原動力を構成するのであります。

かく消極的に活力を節約しようとする奮闘に対して一

方ではまた積極的に活力を任意随所に消耗しようという精神がまた開化の一半を組み立てている。その発現の方法もまた世が進めば進むほど複雑になるのは当然であるが、これをごく約つづめてどんな方面に現われるかと説明すればまず普通の言葉で道楽という名のつく刺戟に対し起るものだとしてしまえばいちばん早はやわか分りであります。道楽といえは誰も知っている。釣つり魚りをするとか玉たまを突くとか、碁ごを打つとか、または鉄砲かっを担いで猟に行くとか、いろいろのものがありません。これ等は説明するがものはない、ことごとくみずから進んで強いられざるに自

分の活力を消耗して嬉しがるほうであります。なお進んではこの精神が文学にもなり科学にもなりまたは哲学にもなるので、ちよつと見るとはなはだむずかしげなものも皆道楽の発現にすぎないのであります。

この二様の精神すなわち義務の刺戟に対する反応としての消極的な活力節約とまた道楽の刺戟に対する反応としての積極的な活力消耗とが互に並び進んで、コンガラカツて変化していつて、この複雑きわま極きりなき開化というものができるのだと私は考えています。その結果は現に吾々が生息している社会の実況を目撃すればすぐ分りま

す。活力節約のほうからいえばできるだけ労働を少なくしてなるべくわずかな時間に多くの働きをしようしようと工夫する。その工夫が積り積って汽車汽船はもちろん電信電話自動車たいへんなものになります。元を糺せば面倒を避けたい横着心の発達した便法にすぎないでしょう。この和歌山市から和歌の浦までちよつと使いに行ってこいといわれた時に、でき得るなら誰しも御免蒙りたい。がどうしても行かなければならぬとすればなるべく楽に行きたい、そうして早く帰りたい。できるだけ身体は使いたくない。そこで人力車もできなければな

らないわけになります。その上に贅沢ぜいたくをいえば自転車にするでしょう。なお我儘わがままをいい募ればこれが電車にも変化し自動車または飛行器にも化けなければならなくなるのは自然の数であります。これに反して電車や電話の設備があるにしてもぜひきよう今日は向うむこまで歩いて行きたいという道楽心の増長する日も年に二度や三度は起らないとも限りません。好んで身体を使って疲労を求め。吾々が毎日やる散歩という贅沢も要するにこの活力消耗の部類に属する積極的な命の取扱とりあつかいかた方かたの一部分なのであります。がこの道楽気だうらくきの増長した時にさいわいに行つてこい

という命令が下ればちようど好いが、まあたいていはそ
う旨うまくはゆかない。いい付かった時は多く歩きたくない
時である。だから歩かないで用を足す工夫をしなければ
ならない。となるといきおい訪問が郵便になり、郵便が
電報になり、その電報がまた電話になる理窟つまです。詰つまる
ところは人間生存上の必要上にか仕事をしなければな
らないのを、なろうことならしないで用を足してそうし
て満足に生きていたいという我儘りようけんな了簡りようけん、と申しまし
ようかまたはそうそう身を粉こにしてまで働いて生きてい
るんじや割に合わない、馬鹿ばかにするない冗談じょうだんじゃねえ

という発憤の結果が怪物のように辣腕らつわんな器械力と豹変ひょうへんしたのだとみれば差支さしつかえないでしよう。

この怪物の力で距離が縮まる、時間が縮まる、手数が省ける、すべて義務的の労力が最少低額に切詰めきりつられたうえにまた切詰められてどこまで押しつけてゆくか分らないうちに、かの反対の活力消耗と名づけておいた道楽根性のほうもまた自由我儘のできるかぎりを尽して、これまた瞬時の絶間たえまなく天然自然と発達しつつ留め度とどもなく前進するのである。この道楽根性の発展も道德家にいわせると怪けしからんとか言いましょう。がそれは徳義上の問

題で事実上の問題にはなりません。事実の大局からいえば活力をわが好むところに消費するというこの工夫精神は二六時中休みつこなく働いて、休みつこなく発展しています。もともと社会があればこそ義務的の行動を余儀なくされる人間も放り出^{ほう}しておけばどこまでも自我本位に立脚するのは当然だから自分の好^すいた刺戟に精神なり身体なりを消費しようとするのは致^{いた}し方^{かた}もない仕儀である。もっとも好いた刺戟に反応して自由に活力を消耗するといったってなにも悪いことをするとは限らない。道楽だって女を相手にするばかりが道楽じゃない。好きな

真似まねをするとは開化の許すかぎりのあらゆる方面に亘わたつての話であります。自分が画えがかきたいと思えばできるだけ画ばかりかこうとする。本が読みたければ差支ない以上本ばかり読もうとする。あるいは学問が好だといって、親の心も知らないで、書齋へ入はいって青くなっている子息むすこがある。傍はたから見ればなんのことか分らない。親父おやじが無理算段の学資を工面して卒業のうえは月給でも取らせて早く隠居でもしたいと思っこどもているのに、子供こどものほうでは活計くらしのほうなんかまるで無頓着むとんじやくで、ただ天地の真理を発見したいなどと太平楽を並べて机もたに靠たれて苦にがり切つ

ているのもある。親は生計のための修業と考えているの
 に子供は道楽のための学問とのみ合点がてんしている。こうい
 うような訳で道楽の活力はいかなる道徳学者も杜絶とぜつする
 わけにいかない。現にその発現は世の中にどんな形にな
 って、どんなに現あらわれているかということは、この競争
 劇甚げきじんの世に道楽などとてんでその存在の権利を承認し
 ないほど家業に励精な人でも少し注意されれば肯定しな
 い訳にゆかなくなるでしょう。私は昨晚和歌の浦へ泊りとま
 ましたが、和歌の浦へ行つて見ると、さがり松ごんげんだの権現
 様だの紀三井寺だのいろいろのものがありませんが、その

なかに東洋第一海拔二百尺と書いたエレベーターが宿の裏から小高い石山の巔^{いただき}へ絶えず見物を上げたり下げたりしているのを見ました。実は私も動物園の熊^{くま}のようにあの鉄の格子の檻^{おり}の中に入^{はい}って山の上へ上げられた一人^{ひとり}であります。があれば生活上べつだん必要のある場所にあるわけでもなければまたそれほど大切な器械でもない、まあ物^{もの}数^ず奇^きである。ただ上ったり下ったりするだけである。疑^{うたがい}もなく道楽心の発現で、好奇心兼広告欲も手伝っているかもしれないが、まあ活^{くわ}計^{けい}向^むとは関係の少ないものです。これは一例ですが開化が進むにつれてこ

ういう贅沢なもののが数が殖ふえてくるのは誰でも認識しないわけにゆかないでしょう。のみならずこの贅沢が日に増し細かくなる。大きなものの中に輪がいくつもできて漏斗じょうごみたようにだんだん深くなる。と同時に今まで気づかなかつた方面へだんだん発展して範囲が年々広くなる。

要するにただいま申し上げた二つの入り乱れたる経路、すなわちできるだけ労力を節約したいという願望から出てくる種々の発明とか器械力とかいう方面と、できるだけ気儘きままに勢力を費したいという娯樂の方面、これが

経となり緯となり千変万化錯綜さくそうして現今のように混乱した開化という不可思議な現象ができるのであります。

そこでそういうものを開化とすると、ここに一種妙なパラドックスとでもいいまいしょうか、ちよつと聞くと可笑おかしいが、実は誰しも認めなければならぬ現象が起ります。元来なぜ人間が開化の流れに沿うて、以上二種の活力を発現しつつ今日に及んだかといえは生れながらそういう傾向を有もっていると答えるよりほかに仕方がない。これを逆に申せば吾人の今日あるはまったくこの本来の傾向あるがためにほかならぬのであります。なお進

んでいうと元のままで懐ふところで手をしていては生存上どうしても遣り切れぬから、それからそれへと順々に押され押されてかく発展を遂げたといわなければならぬのです。してみれば古来何千年の労力と歳月を挙あげてようやくのこと現代の位置まで進んできたのであるからして、いやしくもこの二種類の活力が上代から今に至る長い時間間に工夫し得た結果として昔よりも生活が楽になつていなければならぬはずであります。けれども実際はどうか？ 打明うちあけて申せばお互の生活ははなはだ苦しい。昔の人に対して一歩も譲らざる苦痛もとの下もとに生活しているの

だという自覚がお互にある。いな開化が進めば進むほど競争がますます劇はげしくなつて生活はいよいよ困難になるような気がする。なるほど以上二種の活力の猛烈な奮闘で開化は贏かち得たに相違ない。しかしこの開化は一般に生活の程度が高くなつたという意味で、生存の苦痛が比較的やわら柔げられたというわけではありません。ちようど小学校の生徒が学問の競争で苦しいのと、大学の学生が学問の競争で苦しいのと、その程度は違うが、比例にいたっては同じことであるごとく、昔の人間と今の人間がどのくらい幸福の程度において違っているかといえ

ば——あるいは不幸の程度において違っているかといえ
ば——活力消耗活力節約の両工夫において大差はあるか
もしれないが、生存競争から生ずる不安や努力にいたつ
ては決して昔より楽になつていない。いな昔よりかえつ
て苦しくなつていゝるかもしれない。昔は死ぬか生きるか
のために争つたものである。それだけの努力をあえてし
なければ死んでしまふ。已むを得ないからやる。のみな
らず道楽の念はとにかく道楽の途はみちはまだ開けていなかっ
たから、こうしたい、ああしたいという方角も程度もい
たつて微弱なもので、たまに足を伸のぼしたり手を休めたり

して、満足していたくらいのもものだろうと思われる。今日は死ぬか生きるかの問題はだいたい超越している。それが変化してむしろ生きるか生きるかという競争になってしまったのであります。生きるか生きるかというのは可笑しおゆうかございますが、Aの状態で生きるかBの状態おで生きるかの問題に腐心しなければならぬという意味であります。活力節減のほうで例を引いてお話をしますと、人力車を挽ひいて渡世にするか、または自動車のハンドルを握って暮すかの競争になったのであります。どっちを家業にしたって命に別条はないに極きまっているが、ど

つちへ行っても労力は同じだとはいわれません。人力車を挽く方が汗がよほどたぶんに出るでしょう。自動車の御者になってお客を乗せれば——もつとも自動車を有つもくらいならお客を乗せる必要もないが——短い時間で長い所が走れる。糞力くそぢからはちつとも出さないで済む。活力節約の結果楽に仕事ができる。されば自動車のない昔はいざ知らず、いやしくも発明される以上人力車は自動車に負けなければならぬ。負ければ追付おっつかなければならない。という訳で、少しでも労力を節減し得て優勢なるものが地平線上に現われてここに一つの波瀾はらんを誘うと、

ちようど一種の低気圧と同じ現象が開化のなかに起つて、各部の比例がとれ平均が回復されるまでは動揺して已められないのが人間の本来であります。積極的活力の発現のほうから見てもこの波動は同じことで、早い話が今までは敷島しきしまかなにか吹かして我慢がまんしておったのに、隣の男が旨そうにエジプト煙草たばこを喫のんでいるとやっぱりそつちが喫みたくなる。また喫んで見ればそのほうが旨いに違ちがない。しまいには敷島などを吹かすものは人間の数へ入はいらないような気がして、どうしてもエジプトへ喫み移らなければならぬという競争が起ってくる。通俗

の言葉でいえば人間が贅沢になる。道学者は倫理的の立場から始終奢侈しゃしを戒しめている。結構には違ないが自然の大勢に反した訓戒であるからいつでも駄目に終るといふことは昔から今日まで人間がどのくらい贅沢になったか考えてみれば分る話である。かく積極消極両方面の競争が激しくなるのが開化の趨勢すうせいだとすれば、吾々は長い時日のうちに種々様々の工夫を凝しこら知恵を絞ってようやく今日まで発展してきたようなものの、生活の吾人の内生に与える心理的苦痛から論ずれば今も五十年前もまたは百年前も、苦しさ加減の程度は別に変りはないかもし

れないと思うのです。それだからしてこのくらい労力を節減する器械が整った今日でも、また活力を自由に使い得る娯楽の途が備った今日でも生存の苦痛は存外切なものであるいは非常という形容詞を冠かぶらしてもしかるべき程度かもしれない。これほど労力を節減できる時代に生れてもその忝かたじけなさが頭にこたにこたえなかつたり、これほど娯楽の種類や範囲が拡大されてもまあったくその有あり難味がたみが分らなかつたりする以上は苦痛のうえに非常という字を付加しても好いかもしれません。これが開化の産んだ一大パラドックスだと私は考えるのであります。

これから日本の開化に移るのですが、はたして一般的の開化がそんなものであるならば、日本の開化も開化の一種だからそれで宣かろうじやないかでこの講演は済んでしまおうわけであります。がそこに一種特別な事情があつて、日本の開化はそういかない。なぜそうはゆかないか。それを説明するのが今日の講演の主眼である。と申すと玄関を上つてようやく茶の間あたりへ来たくらいの気がして驚くでしょう。しかしそう長くはありません、奥行おくゆきは存外短みじかい講演です。やってるほうだつて長いのは疲れますからできるだけ労力節約の法則に従つて早く

切り上げるつもりですから、もう少し辛抱しんぼうして聴いてください。

それで現代の日本の開化はまえに述べた一般の開化とどこが違うかというのが問題です。もし一言にしてこの問題を決しようとするならば私はこう断じたい、西洋の開化（すなわち一般の開化）は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的というのは内から自然に出て発展するという意味でちようど花が開くようにおのずから蓄つぼみが破れて花卉が外に向うむかのをいい、また外発的とは外からおっかぶさった他の力で已むを得

ず一種の形式を取るのを指したつもりなのです。もう一口説明しますと、西洋の開化は行雲流水のごとく自然に働いているが、御維新後外国と交渉を付けた以後の日本の開化はだいたい勝手が違います。もちろんどこの国だつて隣づき合がある以上はその影響を受けるのがもちろんのことだからわが日本といえども昔からそう超然としてただ自分だけの活力で発展したわけではない。ある時は三韓またある時は支那というふうにだいたい外国の文化にかぶれた時代もあるでしょうが、長い月日を前後ぶつ通しに計算してだいたいのうえから一瞥して見るとまあ

比較的內発的の開化で進んできたといえましょう。少なくとも鎖港排外の空気で二百年も麻酔したあげく突然西洋文化の刺戟に跳ね上ったくらい強烈な影響は有史以来まだ受けていなかったというのが適當でしょう。日本の開化はあ那个时候から急劇に曲折しはじめたのであります。また曲折しなければならぬほどの衝動を受けたのであります。これをまえの言葉で表現しますと、今まで内発的に展開してきたのが、急に自己本位の能力を失って外から無理押しに押されて否応なしいやおうにそのいうとおりになければ立ち行かないという有様になったのであります。

す。それが一時ではない。四五十年前に一押し押された
なりじつと持ち^{こた}応えているなんて^{らく}楽な刺戟ではない。
時々^らに押され刻々に押されて今日に至ったばかりでなく
向後何年のあいだか、またはおそらく永久に今日のごと
く押されてゆかなければ日本が日本として存在できない
のだから外発的というよりほかに仕方がない。その理由
はむろん明白な話で、前^{ぜん}詳^{じょう}しく申^{もう}上^{しあ}げた開化の定義に
立^{たち}戻^{もど}って述べるならば、吾々が四五十年前はじめて打^ぶつ
かった、また今でも接触を避けるわけにゆかないかの西
洋の開化というものは我々よりも数十倍労力節約の機関

を有する開化で、また我々よりも数十倍娯楽道楽の方面に積極的に活力を使用し得る方法^うを具備した開化である。粗末な説明ではあるが、つまり我々が内発的に展開して十の複雑の程度に開化を漕ぎつけたおりもおり、^{はか}図らざる天の一方から急に二十三十の複雑の程度に進んだ開化が現われて俄然^{がぜん}として我等に打って懸ったのである。この圧迫によって吾人は已を得ず不自然な発展を余儀なくされるのであるから、今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのでなくって、ヤツと気合を懸けてはぴよいぴよいと飛んでゆくのである。開化のあらゆる階

段を順々に踏んで通る余裕を有たないから、できるだけ大きな針でぼつぼつ縫って過ぎるのである。足の地面に触れるところは十尺を通過するうちにわずか一尺ぐらいなもので、他の九尺は通らないのと一般である。私の外発的という意味はこれでほぼ御了解になったろうと思います。

そういう外発的の開化が心理的にどんな影響を吾人に与うるかというところとちよつと変なものになります。心理学の講筵こうえんでもないのでにむずかしいことを申上げるのももうしあいかがと存じますが、必要の個所だけをごく簡易に述べ

て再び本題にもと戻るつもりでありますから、しばらく御辛抱を願います。我々の心は絶間なく動いている。あなたがたは今私の講演を聴いておいでになる、私は今あなたがたを前に置いてなにかいつている、双方ともにこういう自覚がある。それにお互の心は動いている。働いている。これを意識といたるのであります。この意識の一部分、時に積れば一分間くらいのところを絶間なく動いている。大きな意識から切り取って調べてみるとやはり動いている。その動き方は別に私が発明したわけでもなんでもない、ただ西洋の学者が書物に書いたとおりをもつともと

思うから紹介するだけではありませんが、すべて一分間の意識にせよ三十秒間の意識にせよその内容が明瞭めいりょうに心に映ずる点からいえば、のべつ同程度の強さを有して時間の経過に頓着とんじゃくなくあたかも一つ所にこびり付いたように固定したものではない。必ず動く。動くにつれて明かな点と暗い点ができる。その高低を線で示せば平たい直線では無理なので、やはりいくぶんか勾配こうばいの付いた弧線すなわち弓形ゆみがたの曲線で示さなければならなくなる。こんなに説明するとかえって込み入ってむずかしくなるかもしれないませんが、学者は分ったことを分りにくくいうもの

で、素人しろうとは分らないことを分ったように吞込のみこんだ顔をす
るものだから非難は五分々々である。今いった弧線とか
曲線とかいことをそつと砕いてお話をすると、物をちよ
つと見るのにも、見てこれがなんであるかということ
ハッキリ分るにはある時間を要するので、すなわち意識
が下の方から一定の時間を経て頂点へ上のぼってきてハツキ
リして、ああこれだなと思う時がくる。それをなお見詰
めていると今度は視覚が鈍くなって多少ぼんやりしはじ
めるのだからいったん上の方へ向いた意識の方向がまた
下を向いて暗くなりかける。これは実験してごらんにな

ると分る。実験といつても機械などは要^いらない。頭の中がそうなっているのだからただ試^{ため}しさえすれば気が付くのです。本を読むにしてもAという言葉とBという言葉とそれからCという言葉が順々に並んでいればこの三つの言葉を順々に理解してゆくのが当^{あた}り前^{まえ}だからAが明かに頭に映る時はBはまだ意識に上らない。Bが意識の舞台に上りはじめる時にはもうAのほうは薄ぼんやりしてだんだん識域のほうに近づいてくる。BからCへ移るときはこれと同じ所作を繰^{くり}返^{かえ}すにすぎないのだから、いくら例を長くしても同じことであります。これはきわめて

短時間の意識を学者が解剖して吾々に示したものであります。が、この解剖は個人の一分間の意識のみならず、一般社会の集合意識にも、それからまた一日一月もしくは一年ないし十年のあいだの意識にも応用の利く解剖で、その特色は多人数になったって、長時間に亘ったって、いっこう変りはないことと私は信じているのであります。たとえばみればあなたがたという多人数の団体が今ここで私の講演を聴いておいでになる。聴いていないかたもあるかもしれないが、まあ聴いているとする。そうするとその個人でない集合体のあなたがたの意識の上に

は今私の講演の内容が明かに入る^{はい}。と同時に、この講演に来るまえあなたがたが経験されたこと、すなわち途中で雨が降り出して着物が濡れた^ぬとか、また蒸し暑くて途中で難儀であったとかいう意識は講演のほう^{ほう}が心を奪うにつれて、だんだん不明瞭不確実^{ふめいりよう}になってくる。またこの講演が終って場外に出て涼しい風に吹かれてもすれ^すば、ああ好い心持だという意識に心を専領されてしまつて講演のほうはピツタリ忘れてしまふ。私からいえばまったく有難^{ありがた}くない話だが事実だから已を得ないのである。私の講演を行住坐臥^{ざが}ともに覚えていらっしやいとい

つても、心理作用に反した注文なら誰も承知する者はありません。これと同じようにあなたがたというやはり一個の団体の意識の内容を検してみるとたとえ一か月に亘ろうが一年に亘ろうが一か月には一か月を括るべき炳乎へいこたる意識があり、また一年には一年を纏めるに足る意識があつて、それからそれへと順次に消長しているもの。私は断定するのであります。吾々も過去を顧みてみると中学時代とか大学時代とか皆特別の名のつく時代でその時代々々の意識が纏っております。日本人総体の集合意識は過去四五年前には日露戦争の意識だけになり切つて

おりました。その後日英同盟の意識で占領された時代も
あります。かく推論の結果心理学者の解剖を拡張して集
合の意識やまた長時間の意識のうえに応用して考えてみ
ますと、人間活力の発展の経路たる開化というものの動
くラインもまた波動を描いて弧線をいくつもいくつも繋
ぎ合せて進んでゆくといわなければなりません。むろん
描かれる波の数は無限無数で、その一波一波の長短も高
低も千差万別でありましょうが、やはり甲の波が乙の波
を呼出し、乙の波がまた丙の波を誘い出して順次に推移
しなければならぬ。一言にしていえば開化の推移はど

うしても内発的でなければ嘘だと申上げたいのであります。ちよつとした話が私は今ここで演説をしている。するとそれをお聞きになる貴方あなたがたのほうからいえば初めの十分間くらいは私がなにを主眼にいうかよく分らない、二十分目くらいになってようやく筋道が付いて、三十分目くらいにはようやく油がのって少しはちよつと面白くなり、四十分目にはまたぼんやりしだし、五十分目には退屈たいくつを催し、一時間目には欠伸あくびが出る。とそう私の想像どおりゆくかゆかないか分りませんが、もしそうだとするならば、私がむりにここで二時間も三時間も喋舌しゃべ

つては、あなたがたの心理作用に反して我^がを張ると同じ
ことで決して成功はできない。なぜかといえはこの講演
がその場合あなたがたの自然に逆^{さから}った外発的のものに
なるからであります。いくら咽喉^{のど}を絞り声を嗄^からして
怒鳴^{どな}ってみたって貴方がたはもう私の講演の要求の度を
経過したのだから不可^{いけ}ません。あなたがたは講演よりも
茶菓子が食いたくなくなったり酒が飲みたくなくなったり氷水が
欲^ほしくなったりする。その方が内発的なのだから自然の
推移で無理のないところなのである。

これだけ説明しておいて現代日本の開化に後^{あと}戻^{もど}りをし

たらたいてい大丈夫だいじょうぶでしょう。日本の開化は自然の波動を描いて甲の波が乙の波を生み乙の波が丙の波を押し出すように内発的に進んでいるかというのが当面の問題なのです。が残念ながらそういつていないので困るのです。いつていないというのは、先ほども申したとおり活力節約活力消耗の二大方面においてちょうど複雑の程度二十を有しておったところへ、俄然がぜん外部の圧迫で三十代まで飛び付かなければならなくなつたのですから、あたかも天狗てんぐにさらわれた男のように無我夢中で飛び付いてゆくのです。その経路はほとんど自覚していかないくらいのも

のです。もともと開化が甲の波から乙の波へ移るのはす
でに甲は飽いていたたまれないから内部欲求の必要上ず
るりと新らしいあた一波を展開するので甲の波の好所も悪所
も酸いも甘いも嘗め尽したうえにようやく一生面を開い
たといつて宜しいよろ。したがって従来経験し尽した甲の波
には衣ころもを脱いだ蛇へびと同様未練もなければ残り惜しい心
持もしない。のみならず新たに移った乙の波に揉もまれな
がら毫ごうも借り着をして世間体を繕っているという感が起
らない。ところが日本の現代の開化を支配している波は
西洋の潮流でその波を渡る日本人は西洋人でないのだか

ら、新らしい波が寄せるたびに自分がそのなかで食客いそろうろうをして気兼きがねをしているような気持になる。新らしい波はとにかく、今しがたようやくの思おもいで脱却した旧ふるい波の特質やら真相やらも弁わきまえるひまのないうちにもう棄すてなければならなくなってしまった。食膳しょくぜんに向って皿さらの数を味あじわい尽すどころか元来どんな御馳走ごちそうが出たかハッキリと目に映じないまえにもう膳を引いて新らしいのを並べられたと同じことでもあります。こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を懐いだかなければなりません。

せん。それをあたかもこの開化が内発的でもあるかのごとき顔をして得意でいる人のあるのは宜しくない。それはよほどハイカラです、宜しくない。虚偽でもある。軽薄でもある。自分はまだ煙草を喫^すつてもろくに味さえ分らない子供^{こども}のくせに、煙草を喫^すつてさも旨そうなふうをしたら生意気でしよう。それをあえてしなければ立ち行かない日本人はずいぶん悲酸な国民といわなければならぬ。開化の名は下せないかもしれないが、西洋人と日本人の社交を見てもちよつと気が付くでしょう。西洋人と交際をする以上、日本本位ではどうしても旨くゆき

ません。交際しなくとも宣いといえはそれまでであるが、
 情けなさないかな交際しなければいけないのが日本の現状
 でありましょう。しかして強いものと交際すれば、どう
 しても己おのれを棄てて先方の習慣に従わなければならなく
 なる。我々があの人は肉刺フオークの持ちようも知らないとか、
 小刀ナイフの持ちようも心得ないとか何とかいって、他を批
 評して得意なのは、つまりはなんでもない、ただ西洋人
 が我々より強いからである。我々のほうが強ければあつ
 ちこつちの真似まねをさせて主客の位地を易かえるのは容易の
 ことである。がそうゆかないからこつちで先方の真似を

する。しかも自然天然に発展してきた風俗を急に変えるわけにいかぬから、ただ器械的に西洋の礼式などを覚えるよりほかに仕方がない。しぜんと内に醗酵して釀かもされた礼式でないから取ってつけたようではなはだ見苦しい。これは開化じゃない、開化の一端ともいえないほどの些細ささいなことであるが、そういう些細なことに至るまで、我々の遣やっていることは内発的でない、外発的である。これを一言にしていえば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であるということに帰着するのである。むろん一から十までなにからなにまでとはいわない。複雑な問題に

対してそう過激の言葉は慎まなければ悪いが我々の開化の一部分、あるいは大部分はいくら己惚うぬぼれてみても上滑りと評するより致いたし方かたがない。しかしそれが悪いからお止よしなさいというのではない。事実已むを得ない、涙を呑んで上滑りに滑ってゆかなければならないというのです。

それでは子供が背せなに負われて大人おとなといっしよに歩くような真似をやめて、じみちに発展の順序を尽して進むことはどうしてもできまいかという相談が出るかもしれない。そういう御相談が出れば私はないこともないとお答

をする。が西洋で百年かかってようやく今日に発展した
 開化を日本人が十年に年期をつづめて、しかも空虚の譏そしり
 を免まぬかれるように、誰が見ても内発的であると認めるよ
 うな推移をやろうとすればこれまた由々ゆゆしき結果に陥る
 のであります。百年の経験を十年で上滑りもせず遣りと
 げようとするならば年限が十分一に縮まるだけわが活力
 は十倍に増さなければならんのは算術の初歩を心得た
 ものさえ容易たやすく首肯するところである。これは学問を例
 にお話をするのがいちばん早分はやわかりである。西洋の新らし
 い説などを生啗なまかじりにして法螺ほらを吹くのは論外として、ほ

んとうに自分が研究を積んで甲の説から乙の説に移りまた乙から丙に進んで、毫ごうも流行を追うの陋態ろうたいなく、またことさらに新奇を銜てらうの虚栄心なく、まったく自然の順序階級を内発的に経て、しかも彼等西洋人が百年も掛つてようやく到着し得た分化の極端に、我々が維新後四五年の教育の力で達したと仮定する。体力脳力ともに吾等われらよりも旺盛おうせいな西洋人が百年の歳月を費したものを、いかに先驅の困難を勘定に入れなにしたところであらうかその半なかばに足らぬ歳月で明々地に通過しおわるとしたならば吾人はこの驚くべき知識の収穫を誇り得ると同時

に、一敗また起つあたわざるの神経衰弱に罹かつて、氣息奄えんえん々として今や路傍に呻吟しんぎんしつつあるは必然の結果としてまさに起るべき現象でありましょう。現に少し落ち付いて考えてみると、大学の教授を十年間一いっしょうけんめい生懸命にやったら、たいていの者は神経衰弱に罹りがちじゃないでしょうか。ピンピンしているのは、皆嘘の学者だと申しては語弊があるが、まあどちらかといえは神経衰弱に罹るほうが当り前のように思われます。学者を例に引いたのは単に分り易いため、理窟は開化のどの方面へも応用ができるつもりです。

すでに開化というものがいかに進歩しても、案外その
 開化の賜たまものとして吾々の受くる安心の度は微弱なもの
 で、競争その他からいらいらしなければならぬ心配を
 勘定に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変りはな
 さそうである事は前ぜんお話ししたとおりであるうえに、今
 いった現代日本が置かれたる特殊の状況によって吾々の
 開化が機械的に変化を余儀なくされるためにただ上うわ皮を
 滑ってゆき、また滑るまいと思つて踏張ふんばるために神経衰
 弱になるとすれば、どうも日本人は氣の毒といわんか憐あわ
 れといわんか、まことに言語道断の窮状に陥つたもので

あります。私の結論はそれだけにすぎない。ああなさいとか、こうしなければならぬとかいうのではない。どうすることもできない、実に困ったと嘆息するだけで極めて悲観的の結論であります。こんな結論にはかえって到着しないほうが幸であつたのでしよう。真というものは、知らないうちは知りたいたいけれども、知ってからはかえつてアア知らないほうがよかつたと思ふことが時々あります。モーパサンの小説に、ある男が内縁の妻に厭いや気がさしたところから、置手紙かなにかして、妻を置き去りにしたまま友人の家へ行つて隠れていたという話がありま

す。すると女のほうではたいへん怒おこつてとうとう男の所在ありかを捜し当てて怒鳴り込みましたので男は手切金てぎれきんを出して手を切る談判を始めると、女はその金を床ゆかの上に叩きつけて、こんなものが欲しいので来たのではない、もしほんとうにあなたが私を捨てる気ならば私は死んでしまふ、そこにある（三階か四階の）窓から飛とび下りて死んでしまふと言った。男は平気な顔を装ってどうぞといわぬばかりに女を窓の方へ誘う所作をした。すると女はいきなり馳かけて行って窓から飛下りた。死にはしなかつたが生れも付かぬ不具になってしまいました。男もこれほ

ど女の赤心が目の前へ証拠立てられる以上、普通の軽薄な売女ばいた同様の観をなして、女の貞節を今まで疑っていたのを後悔したものとみえて、再び故もとの夫婦に立ち帰って、病妻の看護に身を委ねたというのがモーパサンの小説の筋ですが、男の疑うたがいも好い加減な程度で留めておけばこれほどの大事には至らなかつたかもしれないが、そうすれば彼の懐疑は一生徹底的に解ける日は来なかつたでしょう。またここまで押してみれば女の真心まごころが明かになるにはなるが、取返とりかえしの付かない残酷な結果に陥った後から回顧してみれば、やはり眞実懸かけ価ねのない実相は分らな

くても好いから、女を片輪にさせずにおきたかつたでありましょう。日本の現代開化の真相もこの話と同様で、分らないうちこそ研究もしてみたいが、こう露骨にその性質が分つてみるとかえって分らない昔のほうが幸福であるという気にもなります。とにかく私の解剖したことがほんとうのところだとすれば我々は日本の将来というものについてどうしても悲観したくなるのであります。外国人に対して乃公おれの国には富士山があるというような馬鹿は今日はあまりいわないようだが、戦争以後一等国になったんだという高慢な声は随所に聞くようである。

なかなか気楽な見方をすればできるものだと思います。
ではどうしてこの急場きゆうばを切り抜けるかと質問されても、
前申ぜんしたとおり私には名案もなにもない。ただできるだ
け神経衰弱に罹らない程度において、内発的に変化して
ゆくがよかろうというような体裁ていさいの好いことをいうより
ほかに仕方がない。苦にがい眞実を臆面おくめんなく諸君の前にさら
け出して、幸福な諸君にたとい一時間たりとも不快の念
を与えたのは重々お詫わびを申し上げますが、また私の述べ
来きたったところもまた相当の論拠と応分の思索の結果から
出た生真面目きまじめの意見であるという点にも御同情になつて

悪いところはおおめ大目に見ていただきたいのであります。

(明治四十四年八月和歌山において述)

(明治四四・一一・一〇『朝日講演集』)

日本文学電子図書館

現代日本の開化

著 者

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 9 卷」角川書店

昭和42年10月10日 6版発行

日本文学電子図書館